

制御—克服理論による物語の理解

物語の快楽は〈症状〉か〈抑圧の解除〉か？

藤井 康子

（医療法人 平井クリニック*1）

はじめに

2023年度、私は、大阪大学大学院の人間科学研究科博士前期課程で、ジョセフ・ワイスの制御—克服理論を紹介する研究を行いました。その関係で、修論の内容の一部と、それを踏まえた今後の研究の展望を、「〈身〉の周辺テーマ」としてここに紹介したいと思います。

制御—克服理論—Control-Mastery Theory 略してCMT—is、1970-90年代にアメリカの精神分析家ジョセフ・ワイスが開発した精神分析理論です。ワイスによれば、すべての精神病理は、無意識の病因的信念（病気の原因となる強い思い込み）が原因となって生じ、その信念が間違いであったと証明されれば、治癒に至ります。

去勢不安の背景にある病因的信念

「病因的信念」の概念は、精神分析の創始者フロイトが着目した男の子の去勢不安に由来します。去勢不安の原因は、フロイトによれば、去勢が現実の脅威であると男の子が信じることです。このような信念は、例えば、男の子が自慰をしているときに、親から去勢の脅しを受け、その後、偶然女性器を目撃した際に、「あの脅しは本当だった！」と衝撃を受けることによって獲得されます。

ワイスによれば、この信念の内容は、「性的な目標を追求すれば、罰を受ける（去勢される）だろう」と一般化できます。去勢の信念は、このように罰の危険性を強

く警告するため、その持ち主は、性的な目標全般（例えば、同性との競争に勝つことや、異性と親密な関係になることまでも）を避けなければならない、本来ならばやりたいと思っていた行動をとることができません。そのため彼は、無意識のうちに、自分自身を苦しめている信念が、実は間違いであったということを証明したい—つまり、「性的な目標を追求すれば罰を受けるだろう」という信念を反証したい—と願うようになります。

心理療法とは何か

ワイスによれば、人が心理療法を受ける目的は、病因的信念を反証し、信念を変える（上書きする）ことです。心理療法において患者は、主に「テスト」と呼ばれる無意識的な方法によって信念を反証します。テストとは、患者が治療者との関係の中で、「信念が正しいのか、間違っているのかを確かめること」を指しています。

フロイトの理論を拡張したワイス

フロイトは、精神病理の原因として、去勢の信念とその「女性版」以外の信念を想定しませんでした。他方ワイスは、それら以外にも多様な病因的信念があると想定することで、フロイトの理論を拡張しました。

転移テストと能動反転テスト

テストには、「転移テスト」と「能動反転テスト」の二種類があります。例えば、去勢の信念をもつ患者の場合、「性的な関心を表明することで、治療者が自分に罰を

*1 現所属：医療法人 平井クリニック、立命館大学大学院先端総合学術研究科

与えるのかどうかを確かめる」という方法でテストを行う可能性があります。このテストでは、治療者が患者に罰を与えない場合に、患者は信念を反証することができます。この方法は「転移テスト」に分類されます。

また、同じ患者が、「治療者が性的な関心をもつことに対して罪悪感をもつように仕向け、治療者がその罪悪感に屈するのかどうかを確かめる」という方法でテストを行う可能性もあります。このテストでは、治療者が罪悪感に屈しない場合に、患者は信念を反証することができます。この方法は「能動反転テスト」に分類されます。

どちらのテストにおいても患者は、治療者との関係において、幼少期に経験したトラウマを再現し、治療者の行動が信念を裏づける傾向にあるのか、反証する傾向にあるのかを確かめようとします。転移テストにおいて患者は、トラウマにおける幼少期の自分自身の役割をとり、治療者に親の役割を割り当てますが、能動反転テストではこれが反転します。

病因的信念の獲得と反証

ここまでの内容をまとめると、以下のようになります。まず、トラウマ的な経験があり、その経験からの無意識的な推論によって、患者は病因的信念を獲得し、精神病理を発症します。最後に、テストを通じて無意識の信念を反証することによって、治癒に至ります。

制御-克服理論を用いた物語の理解

私が修論で制御-克服理論を紹介したのは、「制御-克服理論に基づいて物語を理解する」という将来的な研究目標のためでした。

では、制御-克服理論に基づいた物語の理解にはどのような特徴があるのでしょうか？ その一端を明らかにするため、ここで、前期フロイトの治療論とワイスの治療論との違いを整理しておきます。

転移についての考え方の違い

ワイスは、後期フロイトの理論に基づいて制御-克服理論を開発しました。ワイスによれば、後期フロイトの理論および制御-克服理論は、前期フロイトの理論と鋭く対立します。

前期フロイトは、患者の治療者に対する転移を、幼児的満足の追求であり、同時に治療抵抗でもあるものと

して—つまり、病的な過程として捉えていました。対照的にワイスは、転移を、治癒に向けた無意識的な計画に沿って患者が行うテスト—つまり、治療努力として捉えました。

この違いが、前期フロイトによる物語理解と、制御-克服理論による理解の違いに反映されることになります。

物語の快楽は〈症状〉か〈抑圧の解除〉か？

フロイトの「夢解釈」に登場する、アンデルセンの童話『はだかの王さま』を例に考えてみましょう。「夢解釈」においてフロイトは、この童話を、「『裸は恥ずかしいことなんだぞ』という教訓話に偽装された、『裸になりたい願望』（幼児的願望の一種）の充足」であると理解しました。この理解は、物語が作者や読者に与える快楽を〈症状〉のような病的過程として捉えるものであると言えます。

では、制御-克服理論を用いれば、別の理解が可能になるのでしょうか？ まず、童話の前半部分は、実際には詐欺師である二人の仕立て屋の誘導によって、「『服が見えない』＝『王様が裸に見える』ということは、『自分は愚かな人間である』ということを示す恥ずかしいことなのだから、秘密にしなければならない」という信念を人々が身につける過程、として理解することができます。次に、童話の後半部分は、「王様は裸だ！」という子どもの発言をきっかけとして、人々がこの信念を反証していく過程、として理解することができます。人々は、子どもの発言とそれに対する周囲の反応によって、「王様が裸に見える」ことを口にしても、実際にはそれほど危険はない、と気づいていくのです。

つまり、制御-克服理論を用いれば、この童話の内容は、人が病因的信念を身につける過程と反証する過程の両方—すなわち、精神病理の発展過程と治癒過程の両方—を描いている、と理解することができます。これを、以下のように言い換えることもできるでしょう—すなわち、童話の前半部分では、登場人物が「王様は裸だ！」という認識や発言を抑圧・制止していく（防衛を強めていく）過程が描かれており、後半部分では、その防衛を解除していく過程が描かれている—と。

最後に、この童話が読者にどのような影響を与えるのかを考えてみましょう。読者が童話の登場人物に同一化し、登場人物の経験を追体験しながら童話を観賞すると仮定すると、物語の前半部分で読者は、「王様は裸だ！」という認識・発言の抑圧・制止を追体験し、後半ではそ

の抑圧と制止の解除を追体験するということになるでしょう。

上の考察では、作者の経験については考察しませんが、このように、制御-克服理論を用いた物語の理解では、物語が作者や読者に与える快楽を、〈症状〉としてではなく〈抑圧の解除〉として—つまり、治癒的な過程として—説明するという特徴があります。

展 望

この論考では詳しくは立ち入りませんが、制御-克服理論を用いた物語の理解では、物語を、「作者と読者がそれ（物語）を介して相互に病因的信念をテストすることを可能にする装置」として理解することになるでしょう。

文 献

- Weiss, J., 1993, *How Psychotherapy Works*. The Guilford Press.
- Weiss, J., Sampson, H., & the Mount Zion Psychotherapy Research Group, 1986, *The Psychoanalytic Process: Theory, Clinical Observations and Empirical Research*. The Guilford Press.
- アンデルセン, ハンス・クリスチャン (著), バーギニア・リー・パートン (絵), 乾侑美子 (訳), 2004, 『はだかの王さま』岩波書店.
- フロイト, ジークムント (著), 新宮一成 (訳), 2007・2011, 「夢解釈」, 新宮一成・鷺田清一・道籙泰三・高田珠樹・須藤訓任 (編), 『フロイト全集 4・5』岩波書店.

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

